秋田でなまはげに会う　　その２

なまはげの格好をした８名ほどの男子がなまはげらしい所作で太鼓をうち鳴らす。女子も４名ほどが法被姿でサポート。おどろおどしくもリズミカルな太鼓の音が場内に響きわたる。足を踏みならし、手をふりあげながらの見事なバチさばきである。異形のなまはげを表現することは、普通の中学生にとって至難の技にちがいない。それでも東北の寒村の吹雪き舞う浜でのなまはげの荒ぶるさまが見事に表現された演舞であった。終了と同時に大きな拍手が館内を包む。なまはげの里で、「もてなすもの」「もてなされるもの」がひとつになった瞬間である。

ふと横に笑顔が近づいてきた。バス応援団の同郷Ｆさんである。我々の席もとってくれてるらしい。反対側の観客席に移動、挨拶をかわし着座してやっと徳島私設応援団が全員集結した。やがて会場にも各県の選手団が整列して開会式が始まった。息子は監督のすぐ後ろに並び、いつもどおりののほほんさである。主催者、開催首長のあいさつが続き、迫力のある居合いの演武で開会式が終了した。

会場の入口には地元小学生から各県選手団への応援メッセージが書かれた幟旗が並んでいたが、場内にも地元中学生からの応援メッセージが掛かっている。徳島県の選手団へのエールを読むとまるで自分自身が選手になったようで胸が熱くなる。期待に応えなければならないのは選手たちだけではあるまい。各地方の方言が飛び交う観覧席は満員で、館内には選手たちの勝とうとする意欲と応援団の勝ってほしいと願う期待が混じりあいながら充満していく。そんな空気を切り裂くように大きな太鼓の音が鳴り響いた。いよいよ覇権を争う合戦の始まりである。

少年女子は長野との開幕戦だ。なんとか初戦を突破してほしい。先鋒の横山はじっくり攻めて行く。延長を重ねたあと相手の一瞬のすきをとらえて一本勝ち。徳島応援団席からは大きな拍手が沸き起こる。次鋒の細川も先に一本とられたものの２本を取り返しての勝利。中堅の中野も一本を先取して押し切り見事な勝利を決めた。副将の河井と大将の平野は共に引き分けて３―０の快勝である。応援団席には喜びが弾け安堵が漂う。はるか北の地までバスを仕立てて乗り込んできた甲斐があったというものだ。ブルーススプリングスティーンの歌のように夜を爆走して１８時間、しかも秋田では宿泊場所が確保できず手前の山形県内に一泊しての秋田入りという過酷な旅程を乗り越えての応援が子供達の勝利を呼び込んだとも言える。今日は深夜３時に宿舎を出発して朝の６時に会場入りしたとの事。なんともすさまじく気合いのこもった応援であり愛情であることだろう。そんな子供や孫たちへの思いが選手たちに伝わらないわけがない。初戦の勝利は応援団と選手団とで手にした勝利なのである。贅沢にも飛行機でゆったりと乗り込んだ肩身の狭い我々にも、勝利のお裾分けをいただいてありがたい限りである。

一方男子は３試合目だ。高校総体の時も各県代表の技やスピードに驚かされたが、国体はそれ以上の迫力があるようにも感じる。一回戦の相手は奈良県である。大会前の練習試合では互角以上の戦いだったらしいので、なんとか女子に続いて勝利をものにしてほしい。初陣をつとめる先鋒の息子の出来不出来はチームの勝敗に大きく影響する。しょっぱなに相手に打撃を与えればチームの志気そのものを高められるからだ。先手必勝が試合の鉄則であり、良いムードは勝利の連鎖を呼び込む伏流水である。なんとしても相手を倒さねば奈良？ない。

「はじめ！」の声がかかる。「ヤア！」気合いを表わす声は出てるようだ。対戦相手は山本。序盤は小ぜりあい、つばぜりあいが続く。西田はスロースターターで手数も多い方ではない。力戦型ではなくどっちかといえば柔軟なタイプである。うまく相手の動きに入り込んで返し技か、飛び込みのメンで一本を狙う戦法が得意だ。しかし他県のトップクラスの剣士たちにそれが通用するかどうか？ある程度は積極的に攻めて相手の技を押さえ込むことをしなければ、こちらも技をくり出すチャンスは作れまい。やはり緊張しているのか動きが悪そうだ。惜しい打突も少ない。思いきって打って出なければいけない瞬間に躊躇があり、攻め切れない。そうこうするうちにだんだんと劣勢に追い込まれてきた。終盤にメンを打ち合ったが一瞬はやく相手の剣が早かった。後はなすすべもなく一本負。最悪の展開である。がっくりするがまあ仕方がない。次鋒以下の活躍に期待を託すのみだ。

次鋒鎌田の相手は田原である。お互いスピードを活かして打ち合う。田原のコテが決まる。しかし鎌田もメンを取り返していよいよ勝負。鎌田の動きは悪くない。押している。これは行けそうだ、と思った瞬間、悪夢のコテを決められる。応援席にも残念の溜息が広がる。いきなりの二敗は厳しい。じわっと脂汗が出てくる。喉の奥が引きつったように干涸びている。残された３人はがけっぷちに押し込まれたのだ。しかし中堅の峰本は必死に踏ん張って、神前に必殺のコテ打ちを決めて一本勝ち。ようやく応援団にも生気がよみがえる。なんとか後一人副将の松本に反撃を望みたいところだ。２―２で大将戦に持ち込めば徳島の勝ちパターン、四国大会での再現が期待できる。軽快なフットワークで松本が攻め立てる。しかし相手の西畑も一歩もひかない。攻めて攻められる一進一退の攻防が続く。ここで負ければ勝負が決まる。必死に剣を突き立てる松本だがなかなか旗は上がらない。先行している余裕だろうか、西畑はうまく攻めをしのいでいる。松本は一本が欲しい。意を決してメンに飛び込んだその瞬間、待っていたかのような相手のコテ。さっと旗が上がる。気持ちがへなっと萎える音がする。初戦敗退という厳しい現実、非情な結果である。大将の福川も気落ちしたのかいつもの力を出せぬまま中平にメンを２本決められてあえなく破れた。結果は４―１の完敗だ。

勝敗を隔てるのは紙一重である。しかしその紙の厚さとはどれほどのものなのか？実力的には相手とそれほど差があるとは思えない。どっちが上か下かはおそらくトレース紙一枚くらいの違いだろう。しかし勝者と敗者をわける紙一重は限りなく厚く堅い。勝つ覚悟で望んだが夢は叶わなかった。そんな選手たちがその落胆の表情を背中にまで滲ませながら退場する。悔しさが吊り上がった両肩にぶら下がっている。破れた選手たちに善戦健闘の言葉以外どんな言葉をかけてやることができるというのだろう。はるか遠く子供や孫たちに夢を託して秋田の地にまで駆けつけた応援団の熱意や愛情さえ、勝利から突き放された選手ひとりひとりの悔しさや失望を埋め合わせるにははるかに遠く及ばない。彼らにしてみれば、応援団の熱意や愛情に笑顔で応えたい希望も自信もあったはずだが、そんなささやかな野望も水泡に帰したのである。思いどおりいかないのが人生だ。そんなことくらい選手たちもとっくにわかっている。しかし物わかりの良いアスリートでは仕方あるまい。負ければちょっと眉間にしわを寄せるくらいの無頼さが少年には似つかわしい。応援団からは気持ちの整理をつけたあとのさっぱりした温かい拍手が送られたが、選手たちの眉間のしわまでは届いたかどうか？

女子の２回戦は午後の２時頃から始まる。それまで時間があるので会場の外に出てテントをまわる。防具や出場選手名がプリントされた定番の手ぬぐいなどが売られている。奥の芝生では小さな子供達が懸命に歓迎の踊りを踊っている。テントの中には椅子とテーブルも用意されて、無料の汁物の接待もあったようだ。地域総出で国体を盛り上げているようすが伝わってくる。会場一帯が国体一色である。周辺の雰囲気を楽しんだところでふたたび館内にもどる。そろそろ女子の２試合目がはじまる。相手の大阪は強敵である。しかしここを突破しなければ明日がない。試合は接戦ながら前のふたりが破れ、中堅で一矢を報いたものの後のふたりも武運がなく４―１の成績でベスト８入りは果たせなかった。上位には届かなかったが、男子女子とも精一杯の善戦健闘だったと思う。翌日の対戦の結果、男女とも開催県の秋田が優勝の栄冠を勝ち取ったが、その熱闘の一部はテレビでも放送され高校剣道ファンの注目を集めた。

つづく